

広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要
 (第44号 2016.3)

インクルーシブ教育システムの基盤となる 学習環境整備のあり方の検討

—通常学級の教員による特別支援学級での授業実践から—

梶山 雅司 高阪 英徳 城 一樹 高橋 望
 松島 充 朝倉 淳 植田 敦三 伊藤 圭子
 牟田口辰己 川合 紀宗 氏間 和仁 林田 真志
 河口 真希 (研究協力者) Basister Michel Pampelon

1. はじめに

政府は、国連障害者の権利に関する条約の発効後も、全省庁において障害のある人々に関する国内法の整備を進めている。また、中央教育審議会は、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」の中で、今後の日本の社会や教育のあり方について答申した。このように共生社会の実現にむけて、日本の教育の在り方が大きく変わりつつある。そこで本研究では、障害のない児童と障害のある児童との学びあいや教科と連携した障害理解教育の実践を通して、将来地域社会のリーダーとなる可能性の高い附属学校の児童が授業や学校生活の中で障害のある児童に対して合理的配慮を行ったり、障害についての知識理解を深めたりする機会を通して学習環境整備のあり方を検討したり、個々の能力や困難の違いが理解できる、学力と人格を兼ね備えた人間教育のあり方を検討することを本研究の目的とし、実践から考察した内容を報告する。

2. 研究の目的

附属東雲小学校は、平成25年度に文部科学省「インクルーシブ教育システム構築モデル事業(モデルスクール)」に採択され、特別支援教育を着実に推進していくため、障害のある子供に対して、その状況に応じて提供する「合理的配慮」の実践事例を収集するとともに、交流及び

共同学習の実践研究を行い、子ども一人一人の教育的ニーズを把握し、適切な指導及び必要な支援を行う特別支援教育の推進に取り組んできている。具体的には、特別支援学級と複式学級の教科による交流及び共同学習の導入や、学級交流や縦割り学習、運動会等の校内行事での交流などが挙げられる。本研究では、これまでの成果を基に、通常の学級に在籍する児童の多様性や障害の理解を促す実践を交流及び共同学習や教科学習の中で行い、その効果を検証することを目的とした。

3. 方法

インクルーシブ教育の一環として、特別支援学級の担任ではない教員が、特別支援学級の指導案を作成することを通して、日頃の交流だけではとらえられない特別支援児童の実態に気づき、支援の在り方について検討するとともに、その指導案を生かし実際に授業を行うことで特別支援領域に関する見方・考え方を活用し、それぞれの学級の児童支援に生かしていくこととした。大学教員・附属東雲小学校通常学級担任教員・学生が障害理解教育の授業づくり(教科との連携も含む)を、附属東雲小学校特別支援学級および通常学級担任教員・学生が交流及び共同学習の授業づくりを担当する。

4. 内容

Masashi Kajiyama, Hidenori Kouzaka, Kzuki Siro, Nozomu Takahashi, Mituru Matushima, Atushi Asakura Atumi Ueda, Keiko Itou, Tatsumi Mutagutchi, Norimune Kawai, Kazuhito Ujima, Masashi Hayashida, Maki Kawaguthi, and Basister Michel Pampelon: Study of learning environment development of the way to become the foundation of inclusive education system -- From teaching practice in a special classroom by teachers in regular class -

(1) 授業構想

通常の高学年学級担任が授業を行うこととし、対象は日頃交流の多い特別支援学級高学年とした。特別支援学級高学年は5年生男女各1名、6年生女子3名の計5名のクラスである。教科以外での交流は日頃からあるものの、児童の学習における実態はほとんどつかめておらず、授業観察から行うこととした。また、授業を行う教員の研究教科が算数科であることから算数科で授業を行うこととした。都合5時間の特別支援学級教員による算数科の授業を観察、児童の実態把握を行い、聞き取りも含め授業構想を行っていった結果、お金を扱う内容とすることにした。

(2) 単元について

本単元は7月8日から始まる6年生の修学旅行(旅の学習)に合わせた教材であり、普段から算数担当教諭と学習している数の大きさや数の仕組みについての学習につながる学習である。本単元では、3位数と2位数でのお買い物を扱う。修学旅行の旅行先である沖縄の国際通りをイメージして、自分の好きなものを買ったり、両親、祖父母へのお土産について考えたりする状況設定である。本学級の子どもたちの数に関する実態を表1に示す。

表1 子どもたちの数に関する実態

児童名	数に関する実態
5年A (男)	108円を百円玉1枚と、5円玉1枚、1円玉3枚で表現することができ、「ひゃくはちえん」と読める。十の位が空位であることを理解している。確認する際には、5円を指さしながら1, 2, 3, …と5回5円を指さしながら数えたしで確認する。
5年B (女)	108円を百円玉1枚と、5円玉1枚、1円玉3枚で素早く表現することができ、「ひゃくはちえん」と読める。十の位が空位であることを理解している。確認も素早い。
6年C (女)	108円を百円玉1枚と、1円玉8枚で教師とともに表現することができるが、「ひゃくはちえん」と読むことが難しい。十の位が空位であることを理解している。教師に促され

	て5円玉を用いて表現することもできる。
6年D (女)	108円を百円玉1枚と、5円玉1枚、1円玉3枚で表現することができ、「いちひゃくはちじゅうえん」と読む。初めは、1円玉8枚で表現していたが、教師に促されれば自力で5円玉を用いて表現できる。十の位が空位であることを理解している。確認は、進んで2度行い、数え間違いを自分で修正できる。
6年E (女)	108円を百円玉1枚と、5円玉1枚、1円玉3枚で表現することができ、「ひゃくはちえん」と読める。十の位が空位であることを理解している。確認する際には、5円を指さしながら1, 2, 3, …と5回5円を指さしながら数えたしで確認する。

表1から、5人の子どもの数に関する実態には個人差があることが分かるが、個別指導が必要となるほど個人差があるわけではないことが分かる。そのため、本単元は一斉授業の形態で学習を進める。比較的理解度の高い子ども、まだ理解しづらい子どもについては、机間指導の中での個別指導で対応していく。

本単元で学習する2位数と3位数の仕組みでは、十進位取り記数法の構造について理解できるように繰り返し取り上げる。実際の指導では、実際のお金や位取り板を用いて、現実的、操作的、図的に十進位取り記数法の構造についての理解を深めていくようにする。命数法(数の読み方)については、その規則を簡単に紹介するが、子どもたちの選んだ商品1つ1つについて確実に読むことを大切にしながら、数の読み方に慣れていくことを目的とする。また本単元の最後では、商品の大きさと商品の値段の関係について取り上げ、価格の不思議さについて体験することも目的とする。

(3) 指導目標

- ・ 2位数、3位数の十進位取り記数法の構造を位取り板に表すことができる。
(知識・理解)
- ・ 2位数、3位数の数を読むことができる。
(技能)

- ・商品の大きさと値段の高さの関係について考えることができる。（数学的な考え方）と設定し、算数科の内容として1人1人そのポイントで評価できるようにした。

（４）授業の展開

学習活動と内容	指導上の留意点（◆評価）
1. 旅の学習について期待感を持つ。（10分） <ul style="list-style-type: none"> ・沖縄が晴れるといいね。 ・国際通りはお店がいっぱい。 ・お土産は何がいいかな。 2. 本時の課題について知る。（2分）	<ul style="list-style-type: none"> ○学習意欲を高めるために、沖縄の写真を提示したり、お土産の実物を提示したりする。 ○学習の終末時で考察の視点となるように「ちんすこう」を確認しておく。
おみやげは何を買おうかな。	
3. 自分へのおみやげを考える。（10分） <ul style="list-style-type: none"> ・「ちんすこう」を買おう。 ・593円は、100円が5枚だな。 ・518円は「ごひゃくいちじゅうはちえん」じゃないんだな。 4. 家族へのおみやげを考える。（10分） <ul style="list-style-type: none"> ・おばあちゃんに何を買おうかな。 ・1は読まないときがあるんだね。 5. おみやげの大きさと値段について考える。（10分） <ul style="list-style-type: none"> ○「ちんすこう」12個入りと24個入りはどっちが高いかな。 <ul style="list-style-type: none"> ・24個入りの方が高いね。 ・大きい方が高いよ。 ・おいしいのがたくさんあるからね。 ○「ちんすこう」24個入りとシーサーの置き物はどっちが高いかな。 <ul style="list-style-type: none"> ・「ちんすこう」の方が大きいから高いよ。 ・小さくても高いものってあるんだね。 ・そういえば、大きなポテトチップよりも小さなケーキの方が高いよね。 6. 学習の振り返りをする。（3分） <ul style="list-style-type: none"> ・おみやげを買うのが楽しみだな。 ・おみやげを買う時には、値段に気を付 	<ul style="list-style-type: none"> ○2位数、3位数の構造と命数法を確実に理解するために、位取り板への記述とその読み方を机間指導で全員確認する。 ○命数法について慣れていくために、1の読み方について確認する。 ○2位数、3位数の構造と命数法を確実にするために、十の位が空位である商品や、1がある商品を選ぶように個別に投げかける。 ◆2位数、3位数の構造を位取り板に書き、数を読むことができたか。 【知識・理解、技能】 ○商品の大きさと値段の関係について分かりやすいように、実物を用意しておく。 ○商品の大きさと値段の関係について経験的に理解するために、身の回りでの例について考える活動を設定する。 ◆商品の大きさと値段の関係について、身の回りの例で考えることができたか。 【数学的な考え方】

（５）授業後の協議会より

授業後に検討会が行われ、次のような内容で意見交流があった。

（授業者の振り返り）

- ・Cさんの800円出すときに、100円を5枚出してから500円を出して、200円を引いていた。5のまとまりで考えるこ

とができていた。

- ・ものの価値と金額は比例関係であることを押さえたかった。大きさではなく、もともとの値段とものの価値が比例関係であることには気づいていなかった。

（参観者）

- ・言葉を精選するとよい。「お金がいっぱいほしい？高い？」

(参観者)

- ・授業の中で「食べる」という体験は強い。
- ・子ども達が複数いる場合は、自力解決にどうしてもタイムラグが生じる。そこをどうさばいていくのかが、教師の力量。
- ・子どものつぶやきを上手につなぎ合わせていくと、よりおもしろい授業になる。

(授業者)

- ・Cさんは自力解決に時間がかかった。今回は待たせたが、これでよかったのだろうか？Cさんは周りを気にしていたようだったため、待ってあげたことはよかったのではないかと考えている。

(参観者)

- ・単元について書いてある「個人差」とは？

(授業者)

- ・自力解決のスピードの違いと、500円を「5」と初めから考えられるのか、「1, 2, 3, 4, 5」と数えるのかの違い。

(参観者)

- ・なぜ5と考えるのか？それは必要か？

(授業者)

- ・人間は、指が5本ある。数えやすい。5が意識できていれば、例えば9は「5と4で9」と簡単に認識できる。

(授業者)

- ・500円と100円の多さ(価値)の違いを、子ども達はわかっていたのだろうか？そもそも数の大小が分かっているのだろうか？実生活では、ぴったりのお金やちょっと多めのお金を買い物の時に出してほしい。そのような学習が必要かも。

(参観者)

- ・一人一人の到達目標が明確であればよかったのではないかとインクルーシブの視点では、そこを大切にしたい。

(参観者)

- ・実際の買い物の時に、本時の授業のように、すべてのお金がそろっているわけではない。子ども達のお金の感覚はどうなのだろうか？

(特別支援学級教員)

- ・旅の学習本番では、一度は子ども達のお金の出しようを見て、混雑しそうでなければ、ぴったり払うようにする。しかし、そこにそれほどこだわってはいない。500円くらいのものを買うときに、1000円払ってもよい。

(特別支援学級教員)

- ・128円のを130円で買えるかと子ども達に問うと、「買えない」という。子ども達に身につけてほしいのは、ぴったり払う力ではなく、「1000円あれば〇〇が2つは買えるよ」などといった感覚。

- ・毎回授業の最初には、お金の価値(大きさ)が分かるような、活動をしくんでいる。
- ・買い物のしやすさという点を考えて、今年5のまとまり(500円や50円)を活用している。
- ・なるべく本物のお金を使いたい。最終的には、学習成果が生活で使えるように。

(参観者)

- ・大きさと値段は比例しないことの例がわかりにくかったのではないかと？

(授業者)

- ・人にとっての価値が値段になっている。それが単式・複式の子供達はいつのまにか身につけている。その感覚は、特別支援学級の児童にはあるのだろうか？

(特別支援学級教員)

- ・実生活と結びついてくれば、その感覚は身につくのではないかと。買い物経験が大切。

(特別支援学級教員)

- ・「食べる」ことを授業に最後にもってくるのも方法の一つ。
- ・ものの価値で買いたい物を選ぶのではなく、「欲しいもの」「食べたいもの」を選ぶことも大切。

(参観者)

- ・単式・複式では、個別の支援を子ども達自身に選ばせることも必要。

(参観者)

- ・特別支援学級の指導案には、個別の目標がある。単式・複式ですべての子ども達にそのようなことはできないが、3段階くらいのグループで、目標を設定することくらいはできるのではないかと。

(参観者)

- ・いろいろな段階の子ども達が、それぞれに達成感もてるにはどうすればよいのか？

(参観者)

- ・スタートラインは違うが、それぞれが1時間の授業の中で、伸びたと実感できる授業をつくらなければならない。

(参観者)

- ・子ども達に伝わる言葉を大切にする。
- ・実感をもって学ぶことを大切にする。

また、後日これらの取り組みをふまえ行った高学年部の研修会では次のような意見が出された。担任、専科の立場から共生関係を育む手立てについて意見交流を行った。

- ・特別支援学級に行き、給食を食べる。最初はおとなしかった。特支高学年の子も同じ。お互い様子を見ていた。2回目は△△くんがいき、その場を上手にしきっていた。さ

- らに自己紹介をするなど関わると、一気に雰囲気良くなった。また、旅に行く前でもいきっかけとなった。
- ・男子が特別支援学級高学年から離れかけていたので、行くいきっかけになった。
 - ・たてわりで認めていくことが大切。
 - ・小さい差異をどうやって認めていくかが課題。男子のキャラクターに大きな差異があるので、そこをしっかりと認めていきたい。レクをするなど交流しながら関わっていきたい。
 - ・旅の時に、待ち時間で普通にじゃんけんをして遊んでいた。その自然なかかわりがとてもよかった。
 - ・旅の時に、「いけないことはいけない」と E さんや C さんにはっきり言えたのがよかった。友達として、仲間として言える、一緒にやるなど自然にできるのがよかった。→一緒にいる時間があつたから、そういうことができる。共に何かをするということが大切である。
 - ・当たり前でできる子どもたちの共通点を見つけると、そこがインクルーシブな視点で考えられるのではないか。→どこかに属するような友達付き合いをしないとか、処世術を気にしない子ではないか。
 - ・教員でも特別な呼び方や関わり方をしている部分があるので（例えば特支高学年さんなど）、そこをなくしていくことが大切ではないか。
 - ・低学年のうちに、敷居を低くしていくことが大切ではないのか。高学年につれて敷居が高くなりつつあり、関わろうとしなくなっている。そこで担任が機会をつくれていないので、そこを増やしていく必要がある。
 - ・6年生になって、特別支援学級の児童とのかかわりも増えた。その一方で、運動会や旅の学習等でのかかわりに限定されてしまっている状態もある。普段からの自然なかかわりを生むために、意図的な交流の場を積極的に設定していきたい。
 - ・クラスでは、やさしさが欠けている？言葉がきついことがある。「まず聴くこと（受け入れること）」を大切にしている。反論する場合も友達の意見を全否定しないように声かけをしている。
 - ・授業の中で「協調的な問題解決」の場を増やしていくことが、人間関係のつながりを強め

- ていくことになる。学級の雰囲気も変わる。
- ・きちんとすることだけを求めるのではなく、新たな何かを生み出す活動を意図的に仕組んでいくことも大切。
 - ・自分の利害が関係している話し合いでは、言い方がきつくなってしまうこともある。利害が対立しない話し合いでは、感情も対立しない。仲間と新たな知をつくる心地よさを感じることができないのではないか。
 - ・何かを探究していく、追究していくこと自体が面白いと感じられるような授業（取組）を仕組む。
 - ・「話し合い提案カード」の取り組み。毎回司会の班（4人）が司会と記録を務める。クラスのこととはクラスのみんなで決める。
 - ・子ども同士の目線でクラス全員で話し合う。
 - ・話し合いの落とし方、もめごとの対処の仕方を指導してきた。
 - ・クラスの中での友達のよさを見つけていく、理解していくには時間がかかる。じっくりと取り組む。
 - ・「話し合い提案カード」は子どもたちから提案があった。その中で、担任が課題と思っていることが子どもたちも分かっている部分もある。
 - ・クラスで目立っている子だけでなく、その他の子とのつながりを大切にしたい。
 - ・今まで自分が経験したことのない関わりが見られるので、これからの関わりが楽しみ。
 - ・特支高と腹高は運動会で一緒に競技をする。その時に、子どもたちが喜んで練習をする。子どもたちは特支高の子たちと関わるのが好き。関わりも優しい。このいいつながりを大事にしていきたい。
 - ・人数は少ないが、じっくり子どもたちを見ていきたい。できるだけその子自身のことをいいように見ようとしている。（自分の価値観を押しつけずに）
 - ・教師自身に余裕がないと子どもたちとじっくり関われないので、そこを大事にしたい。
 - ・授業で協調的学習を大事にしたい。特に他の子と違う意見を言う子に対して、外れている時もあるけど「おもしろいね」という言葉がけを大事にし、その子を認めていると、他の子の認めていく土壌が育っているのではないか。

- ・単式・複式・特支をどうやってつなげていくのが課題。学年が上がるにつれて、複式だけが狭いコミュニティーに閉じこもってしまう。複式だけ特別な行事があるので、特別化されているような傾向がある。
- ・特別支援学級の子に対して理解や優しく接してくれている関係性がある。とってもいい関わりがある。
- ・特別支援学級の子だから優しいけど、クラスの友達には優しくできない部分も実態としてあるのではないか。
- ・公立学校で交流授業があるが、行く学級で雰囲気は全く違う。担任が受け入れる雰囲気だったらクラスもそうだし、そうでなければクラスもそうになってしまう。やはり学級経営を振り返っていくことが大切ではないのか。
- ・単複特支と全体で集まっているときに、前に出ている教師の関わり方が、子どもたちに関わり方を教えている場になっている。そこを大事にしないといけない。

という内容で、インクルーシブの視点から特別支援学級との交流や学級経営また教師としての心構えなど多岐にわたって研修することができた。

5. 考察

(1) システムとしてのインクルーシブ教育

本校は単式学級（32～40人）の学級と複式学級（1学年8人で2学年16人が同じ教室で学ぶ）そして特別支援学級の3つの学級形態をもつ学校である。特別支援学級との教科での交流及び共同学習は学年の宿泊学習を除き行っていない。これまで特定の教科、単元による交流の授業は試行してきているが、日常的なものにはなっていない。しかし、今回の取り組みのように特別支援教育で行われているいわゆる「合理的配慮」を通常の学級担任が実際に特別支援学級の授業の中で経験することで通常の学級での授業づくりに生かすことができたのではないかと考える。また、特別支援学級児童の実態を授業構想という視点から見ることは、1人1人により深く知ることとともに担任として自学級児童への働きかけも変化してきていると言える。「一緒に学ぶ」ためだけではなく「安心して学ぶ」ことが確認できたことやそれを実現していくための一つの手段として学級経営を司る教師

の有り様も問われていることが単にシステムを作ることが目的ではないことが肝要であると考ええる。

(2) 学習環境整備

授業者は今回の特別支援学級高学年での授業を通して、子どもたちの実態をつかむことの重要性を強く感じた。このことは、通常学級における学習にも非常に役に立つことだと感じた。学習内容に関する実態、子どもたちの生活習慣や普段の興味・関心の実態等を生かして授業を構想することの重要性を再認識できたよい機会となった。具体的には、今回の授業の内容を考えると、単なる3けたまでの加法ではなく、生活経験を基にした実感を持たせることのできる授業を目指した。そのため、大きさは大きいけど値段は安いもの、大きさは小さいけど値段が高いもの、について考察する学習活動を設定した。このように、子どもたちの生活経験を基にした実感を伴う学習活動の大切さを改めて感じることができた。ここで得た考え方をもとに、担任する5年生の算数化の教材を考えることに生かしていった。割合の学習時に自動車の動力の種類によって排出される二酸化炭素量が異なることを教材化していくことにつながり、5年生の子どもたちも地元広島自動車会社が製造している自動車の動力が同じ車種で三種類もあるということに興味をもち、意欲的に学習に取り組むことができた。

また、特別支援学級高学年の子どもたちの数に関する実態の違いから、子どもたちの数年の発達過程における誤概念について知ることができた。具体的には、1円玉を5円玉に両替できるかできないか、繰り上がりのミスなど、とても興味深いものであった。これらの誤概念は通常学級でも普通に表れる子どもの実態であるので、今後の指導に生かしていくことができる。

特別支援学級高学年の子どもたちの興味のあるものを教材にしようと、修学旅行、食べ物を扱った。修学旅行については、今回の授業では地図と実物の食べ物（お菓子）を提示した。もっと5年生の興味も喚起できるように、動画等を用いる工夫が必要だったかもしれない。このことは、担任する学級においても子どもによって興味のあるものを数種類提示していくという新たな取り組みにつながった。また、食べ物については、非常に盛り上がったが、授業前半で実食してしまったため、その後の展開では、

子どもたちの学習意欲が減少する場面が見られた。実食の場面など、子どもにとっての学習のヤマ場は、授業中盤以降に持ってくる方が、子どもたちの学習意欲の向上には効果的であり、そのことが、子どもたちが本時のねらいを達成していくことにつながっていくことを確認することができた。5年生の授業の構成を考えていくときの1つの方向性を得ることができた。

大きい安いもの、小さい高いもの、というものの価値に関する学習は特別支援学級高学年の子どもたちにとって非常に難しいものであった。人間にとっての価値を、貨幣という数値で表現しているこの仕組みを理解するためには、教師の話やプリントの写真、1種類の実物のみでは難しいことが分かった。この学習内容の実感を伴った理解には、実際の店舗での買い物学習を通しての経験が必要ではないかと感じた。通常学級では、いくつかの実物があれば指導可能であろう。この違いは、子どもたちの中に価値に関する概念が育成されているかどうかの違いであると考え。おそらく幼稚園から小学校低学年段階において徐々に育成され始めるであろうこの価値概念の育成や獲得方法を明らかにしていくことによって小学校低学年の算数科の指導をより充実させていくことができると考えた。

6. おわりに

これまで、インクルーシブな観点からの授業研究の成果においては、大きく①障害をもつ児童が学習の場に参加する見通しの形成、②行うべき学習活動に参加できるかどうかの見通し、③学習活動を展開しつつ、認識や表現活動を学習集団において深める過程に参加できるかどうか、という3つの局面があると言われている。(湯浅, 2015: 9) 教えるべき内容があり、様々な児童の差異を平均化することで学習を進めていくことができるかという視点が多く見られた。しかし今後はこれに加え「カリキュラムの柔軟性」の重要性が強調されてきている。大人が教えるべき内容を選定し、それを学問的に系統立てて組織するというやり方ではなく、それぞれニーズの異なる子どもたちが、それぞれ質の高い学びを実現できるよう、子どもたちのニーズに適合したカリキュラムが求められると言える。(石橋, 2015: 40)

インクルーシブ授業を学習する場や環境づ

くりとしての「システムとしてのインクルーシブ教育」として考えるのか、内容自体や個の状況から「柔軟なカリキュラム」として考えるのか二者択一ではなくその両方をバランス良く考えていく必要があると感じている。教科・領域等の特性や単元などにもよるところは大きい。集団としての規範と個性の尊重のバランスを今後どのようにしていくかがインクルーシブ教育の課題と考える。

引用・参考文献

- 1) 湯浅恭正 石橋由紀子他(2015)「インクルーシブ教育をつくる」ミネルヴァ書房.
- 2) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所(2014)「インクルーシブ教育システム構築に向けた児童生徒への配慮・指導事例」ジアース教育新社.
- 3) 佐藤暁(2006)「見て分かる困り感に寄り添う支援の実際」学研.